

巻頭言 「SGU後のグローバル化を考える」	
学士課程教育機構長・グローバルコアセンター長 田中 亮平……1	
[WLC] WLCの取り組み……2-3	
[GCP] GCPの取り組み……4	
[SPACe] 2022年度秋学期についてのご報告……5-6	
[CETL] CETLの取り組み……7	
データサイエンス教育推進センター……8	
新任教職員紹介……8	

## SGU後のグローバル化を考える

学士課程教育機構長・グローバルコアセンター長 田中 亮平



2014年に採択されたSGU（スーパーグローバル大学創成支援）の事業もいよいよ最終年度を迎えた。「人間教育の世界的拠点—平和と持続可能な繁栄を先導する『世界市民』教育プログラム」を掲げてスタートした本学のSGUであったが、この十年で数値に見る成果、数値以外の成果、そして構想テーマの達成にむけたアウトカムにおいて、飛躍的な進展が見られた。派遣・受入れ双方の学生数の増加、国際教養学部の開設、ピースフォーラムやブランクトン工学などの国際共同研究の進展、国外のイベントに積極的に参加する学生の意識の変化など、成果は多岐にわたっている。

その上で、本学のグローバル化が今後どうあるべきかを、次の二つの点を確認しつつ考えて行きたい。一つは日本社会が大学に求めているもの、もう一つは本学のミッションである。

2022年度の我が国への留学生数はコロナ禍の影響から抜け切れない中、前年からわずかに減って23万人であった。コロナ前のピークは2019年度の31万人だったので、急減したように見えるが、それでもSGU初年度2014年度の15万人と比較すれば大きく上回っているのがわかる。つまり、コロナの影響はあっても留学生拡大の基本的な趨勢は維持されていると言える。

また、岸田内閣が設置した教育未来創造会議が昨年9月に行った第一次提言を見ると、大学等の機能強化方策の一つとして、グローバル人材の育成・活躍があげられている。また第二次提言はグローバル化それ自体がテーマとなるようである。

また昨年7月、文部科学省の「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性」が発表された。一つには人口減少が進む我が国においては外国人留学生の受入れと定着が重要な課題であること、二つにはグローバル化の進展を見越して日本人学生の国外就学体験の促進にも力を入れるべきことがうたわれ、さらにこの二つを支える三つ目の柱として、受入れと派遣の基盤となる大学等のさらなるグローバル化の進展が掲げられている。これには「コロナ化で激減した学生交流の回復に向けて」という副題がついていて、高等教育のグローバル化に向けた政府方針には揺るぎがないことを明示している。

冒頭に述べた本学のSGU構想目標は建学の理念、なかでも「人間教育の最高学府たれ」と「人類の平和を守るフォートレスたれ」がその中核をなしている。また本学のミッション・ステートメントには「平和のフォートレ

スを創価大学は目指します」とある。上記のような政府や社会の取り組みが、多分に国家的利益をベースにしたものであるのに対し、本学のグローバル化のベースにあるのは人類益であり、養成すべき人材は世界市民である。

開学以来、創立者が自ら切り開かれた国際交流の歴史と、創立者の期待を自身の使命に変えて海外に雄飛し、それぞれの国で貢献の人生を送ってきた卒業生の活躍は、こうした理念やミッションの精華であった。また卒業後に国外で活躍する人だけがグローバル人材ではない。仕事から生活全般にわたって日本社会のグローバル化は深く浸透している。国内で生活する卒業生であっても、人種や国籍を越えた世界とのつながりを意識し、行動できる人すべてが世界市民である。

こうした伝統はコロナ禍を経ても受け継がれている。コロナ前後の本学の学生生活アンケートの結果によれば、1年生で「留学や研修に在学中に参加したい」と答えた人は、コロナ前の19年度は80%に上ったが、22年度には60%に減っている。一見して内向き志向が強まっているように見えるが、反面、コロナを経てもなお6割の学生が国外修学体験を希望している事実は、本学のグローバル意識の高さを示している。

こうした理念と歴史を踏まえつつ、今後を具体的に考えると、自走化へ向けた措置、数値目標とアウトカムの継承発展などがポイントとなるであろう。補助金終了後の自走化に向けては、五十周年寄付事業を通じて基金が準備され、これによって多くの事業が維持継続される見通しである。中核的なものとしては、政府も重視するインバウンドとアウトバウンド双方の留学生数の確保であろう。少なくともSGU終了時の到達目標数を維持することが基本となる。一方で、事業で掲げた数値目標は多岐にわたっているため、適正な選択と集中が必要となる。

そのうえで、「人間教育の世界的拠点」を目指す中で培われてきた多彩なアウトカムは、さらに発展させていくことが求められる。中間評価で二度S評価を獲得したことや、THE日本大学ランキングの国際性部門でトップ10以内の位置をキープしていることに見られるように、本学は日本を代表するグローバル大学としての評価を得ている。今後もこの評価を堅持しつつ、「平和と持続可能な繁栄を先導する」世界市民の輩出を目指すべきであり、それは同時に建学の理念と本学のミッションを実現しゆくための確かな軌道となるであろう。

## 授業実践報告 文学を用いた英語授業—変容の旅路

ワールド・ランゲージ・センター（WLC）が提供する共通科目英語科目では、ヒューマンスティック・アプローチの実践に努めている。このアプローチでは、学習者の言語能力と人間的な成長（すなわち、新しい挑戦に臨む勇氣、学習者自身と他者への共感、限界に達した際のレジリエンス、この一連の経験を経て得られる知恵）の両方を育成する学習者中心の授業を計画する。ここでは、これらの概念を実現する文学を題材にした英語授業の実践を報告する。

本取り組みは、2022年度秋学期2年生対象の共通科目英語科目English IIIにおいて実施した。English IIIは週1回90分の授業を15回行う。学期開始時、以下の目的と目標を設定した。

### 目的

- 日常生活で自分の勇氣とレジリエンスに気づく。
- 自分の人生の旅路を英語で共有できる。
- 互いを思いやる。

### 目標

- 過去の自分のアイデンティティーと、これまでに生じた変化を共有する。
- 自分に生じた変容の段階をマップに表す。
- マップとして表された視覚的特徴を物語として解釈し表現する。
- 変容の旅路において最も重要と思われた価値を共有する。

これらの目的や目標を4～5週間かけて実現しようと試みた。具体的には、『荒野の呼び声』（多読用教材版）を用い、学生に主人公バックの変容とアイデンティティー発見の旅路に関し、以下を考察してもらった。

- (1) バックがたどったルート
- (2) バックが習得したスキル
- (3) これらの要素とバックの内面の変容との関係

さらに、各回の最後に学生がバックの変化について気づいたことと自身の変容の旅路との関連について考える機会を与えた。評価方法として最後にプレゼンテーションを行なってもらった。

学生は上記3つの考察を以下の活動を通して行った。結果は概ね良好であった。

1. これまで苦手としていたことや、経験した困難について振り返った。同時に、将来への希望や、自分がたどって来た旅路についての誇りを共有した。
2. 学生は創造的にマップを描いた。それにはマインドマップもあれば、ファンタジーマップもあった。テーマパークやビデオゲームとして表現する者もいた。授業アンケートでは、グループディスカッションや問題解決活動に対する高い満足度が窺えた。3分の1の学生がマップを解釈し、英語で表現できた。最終プレゼンテーションのスコアも非常に高かった。

僅かだが、ペースが早かった、物語を読む時間が足りなかった、プレゼンテーションの後、お互いのストーリーについて話し合う時間が少なかったなどの意見があった。総じて、本取り組みにおいて、学生は自分について安心して話していたし、英語でうまく言えず失敗することを恐れなかった。また、教員ともより深くつながることもできた。これらから、文学を題材に展開したヒューマンスティック・アプローチの英語授業は成功したと考えている。

(WLC助教：スゾン・ミツコ・マメ)

## WLC 2023年度の取り組み

WLCにおいては、2019年度より共通科目英語科目のEnglish I-IVにおいてヨーロッパ言語共通参照枠（The Common European Framework of Reference for Languages [CEFR]）に基づくシラバス開発に着手している。各年度、教員研修を重ねて来た結果、各科目のシラバスの到達目標に、CEFRに準拠したCan-doステートメントを記載するまでに至った。さらにそのCan-doステートメントを授業の活動に適用するための方法も学びつつある。今後は、科目を担当する各教員が授業においてCan-doステートメントに基づいた活動を実施し、学生がステートメントに述べられている目標を着実に達成できるよう指導していく必要がある。

CEFRによって言語に関する目標を定め、その目標の実現に向け授業内活動を計画できるようになれば、次に教員が目指す

ものは、目標の達成方法の指導である。ここでいう目標の達成方法とは、新しい知識やスキルを習得する過程は、学習者の変容の過程でもあると捉え、その理念に基づく方法のことである（ヒューマンスティックアプローチ）。そこでは、学習者は未知の事柄や、今までできなかったことに挑戦していくことになる。当然、最初は分からないことが多いし、失敗も経験しなければならない。それらを学びのプロセスとして捉え、学習者自身が自分の学習を自律的に導く必要がある。これは自律性に関することであるが、幸いWLCには自律性の涵養について、高い関心と豊富な経験がある。

CEFRに基づく言語面での目標を設定し、その目標を学習者の自律性を育成しながら達成することが2023年度の大きな目標となる。WLCの英語教員の中でこの目標を共有し、全員の力で実現していきたい。

## 八王子市立加住小学校児童がワールド・ランゲージ・センター（WLC）を訪問

2022年12月22日、八王子市立加住小学校一行（副校長先生、担任の先生、6年生児童35名、支援者2名）がワールド・ランゲージ・センター（WLC）を訪問した。創価大学教育学部と文学部に開講されている英語特講（担当講師：ダニエル・ササキ国際教養学部准教授）のテーマは、小学校英語教育である。この科目では、授業活動の一環として近隣の加住小学校に学生が外向き同校の英語授業を支援している。

毎年この時期には、子どもたちの方が創価大学WLCを訪問するのが恒例となっている。雨の降る寒い中であつたが、子どもたちの元気な姿に、皆の心が温まった。子どもたちは大変行儀がよく、集中力があり、普段の授業とは違う一面を見せてくれた。にこやかに笑いながら、学生スタッフとのアクティビティを通し英語を話すことを楽しんでた。副校長先生も、そんな子どもたちのいつもとは違う姿に驚きを隠せない様子であつた。

訪問は2部構成で行われた。第1部では、WLCセルフ・アクセス・センターにて、英語特講の学生がリードする外国語レッスンで、子どもたちは英会話の練習をした。第2部では、ラーニングcommonsSPACeのアリーナで、日本、インド、ブラジル、シンガポール、マレーシア、フィリピン、ベトナムなど世界各国からの留学生と「本物の英語コミュニケーション」を体験するアクティビティを行った。

今回の訪問も大成功に終えることができたのは、教務部、総務部、学習支援課、WLCの教職員、英語特講の履修学生に支えていただいたおかげである。深く感謝申し上げる。子どもたちの笑い声やおしゃべり、英語でのコミュニケーションなどで、普段より騒がしくなってしまったこととお詫びする。（ダニエル・ササキ）



セルフ・アクセス・センター



SPACe アリーナ

### ■WLC 教員の紹介 ユーケリア・ドネリ准教授



ユーケリア・ドネリ准教授は、WLCのコーディネーターの一人で、主な研究分野は、異文化間コミュニケーション能力、演劇と第二言語習得、コンピュータ支援言語学習、文学における植民地的・フェミニスト的言説である。アイルランド国立コーク大学で、英文学と社会学の学士号、演劇・舞台芸術学の修士号、プロセドラマと第二言語習得の博士号を取得した。1998

年より、JETプログラム（外国青年招致事業：The Japan Exchange and Teaching Programme）の英語教師として、また、文部科学省から奨学金を受け研究員として日本に滞在した。その後も、複数の大学で、講師として英語とコミュニケーションを日本語で教える経験もしてきた。創価大学の人間主義的な教育アプローチに深く共鳴しており、WLCでは外国語としての英語科目と内容言語統合型学習を取り入れた科目を教えている。

GCPディレクター教授 佐々木 諭

## 第10回GCP修了式を開催

第10回GCP修了式が2023年3月17日（金）に開催され、鈴木学長、田代理事長がGCP修了生19名の新たな出発を祝福しました。

今回GCPを修了したGCP9期生、10期生は、新型コロナ流行により、オンライン授業への変更や交換留学の派遣中止など大学生活に大きな影響を受けました。中でも、国内外の大学院進学、国際的な優良企業への就職など、GCP生それぞれが進路を勝ち取り、修了式を迎えました。

修了生を代表して、イギリスの大学院に進学する吉井太郎さん（GCP10期生・法学部卒業）が挨拶を行いました。吉井さんは、「勉学に挑み抜く4年間にする」との決意でGCPに入り、念願の南アフリカへの交換留学にも合格しましたが、2年時の新型コロナウイルスの流行拡大が吉井さんの大学生活を一変させ、留学も取りやめとなりました。それでも、

「この環境に意味を見出して必ず価値創造する、創大を卒業する時にコロナがあったからこそ今の自分がある」といえるよう挑戦することを決め、3年時には司法試験の予備試験に合格し、4年時には、海外大学院に応募し、エセックス大学をはじめ複数の大学院の合格を勝ち取りました。卒業後は、国際人権法を専攻し、世界の人々の尊厳を守ることを決意されています。



第10回 修了式

## フィリピン・キャピトル大学研修、タイ・タマサート大学オンライン研修を実施

2月12日から2月23日までの期間、フィリピン共和国キャピトル大学において海外短期研修が開催され、GCP13期生（現2年生）の26名が参加しました。開講式には、キャピトル大学のファレス首席副学長、トーレス教務担当副学長ら大学首脳はじめ教員、学生らが参加し、GCP生を温かく迎えてくれました。研修はGCPのプログラムゼミの授業時に取り組んだフィリピンに関するグループリサーチについて、現地において調査を行うことを目的としています。

現地の調査では、グループ毎にキャピトル大学の先生と学生が調査のサポートをしてくだり、市役所などの行政機関、学校、医療施設、農村でのインタビュー調査を実施し、貴重な学びの経験となりました。現地調査を取りまとめたリサーチ発表会では、キャピトル大学の先生方がそれぞれのグループの発表に対して丁寧に講評し、GCP生の学びの姿を高く評価されました。

研修に参加した学生は、世界市民として多様性を尊重することの大切さと人々の声に耳を傾け、真摯に正しいことを見極めていくことの重要性を学び、今後の学びへの決意を深め合っていました。

また、2023年3月27日には、タイ・タマサート大学とのオンラインリサーチフォーラムを開催し、GCP12期生

（現3年生）は前年8月のフィリピン研修のリサーチを英語で発表し、タマサート大学の学生は、フィリピン大使館よりフィリピンスタディーズの支援を受けている研究の発表を行いました。フォーラムには、タマサート大学教養学部シーピジャー学部長をはじめ多くの教員・学生らが参加し、在タイ王国フィリピン大使がビデオメッセージを寄せられました。グループに分かれたセッションでは、GCP生の発表やタマサート大学生の発表に対して、活発なディスカッションが行われました。



フィリピン・キャピトル大学研修



# 2022年度秋学期についてのご報告

2022年度秋学期のSPACeのサービスは対面とオンラインを併用しながら進めました。

## ヘルプデスク

ヘルプデスクでは、対面サービスで学習相談を行いました。秋学期の利用者数は97人で前年比2.31と利用者が増加しました。利用者の内訳を見ると、予約が24.7%（前年比0.89）、飛び入りが75.3%（前年比4.87）と、飛び入りによる利用者が増加しました（表1）。相談内容の内訳を見ると、タイムマネジメントなどの自己管理に関する学習相談が最も多く、ついで英語学習や履修相談、課題や試験対策、留学などに関する相談が多いことが分かりました（図1）。

また、秋学期には大学側からの要請で、大学生活を乗り切るためのスタディスキルやICT超初心者編などのセミナーを行いました。このほかにも語学学習や留学、GPA向上などのセミナーを

実施し、述べ108人が参加しました（表2）。

加えて、秋学期には学期にわたって継続的に学習相談を行うピア・サポートを実施し、13人が利用しました。利用者アンケートからは「ピアサポに通うようになって自分が今何をすべきなのか優先順位をつけられるようになり、効率よく課題、バイト、部活に取り組めるようになりました。私生活のリズムも管理できるようになって、とても良かったです。」「自分の思考自体に客観的な目線をいただけたので、スケジュール管理でつまづく根本的な原因に気づけました。」というように、利用者のセルフマネジメント力が高まっている様子が窺えました。

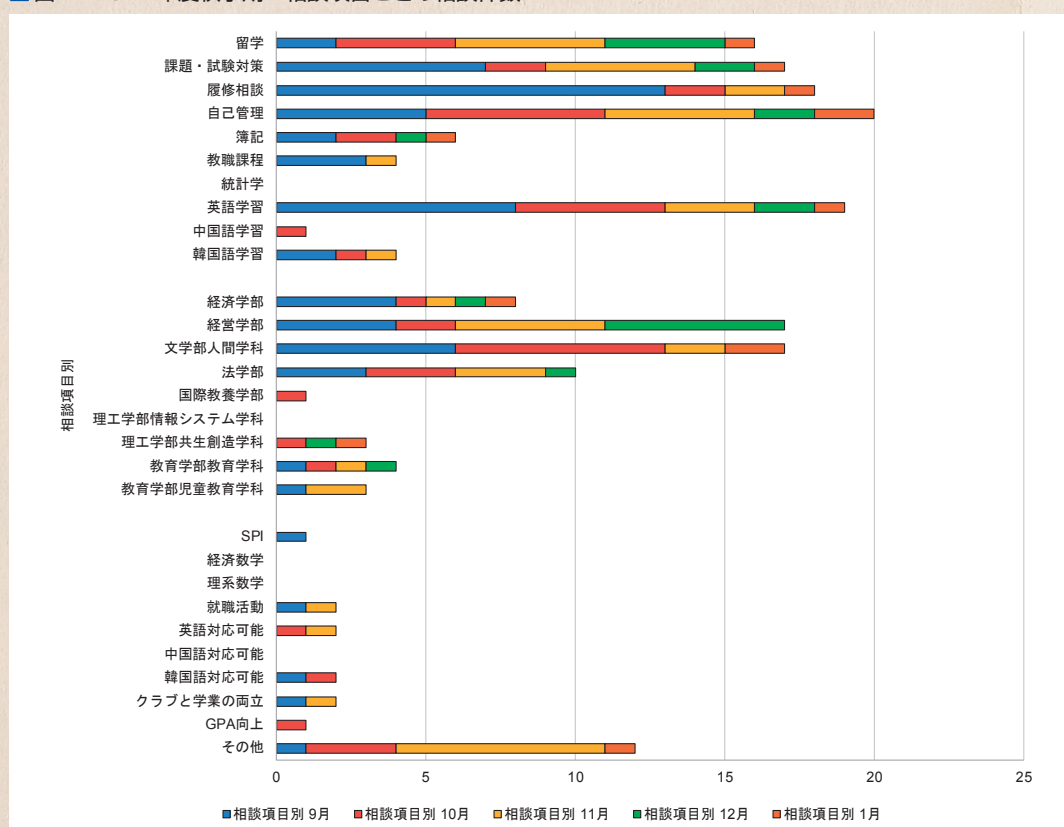
■表1 2022年度秋学期 HELP DESK学習相談利用者（人）

	9月	10月	11月	12月	1月	合計	%	前年比
予約	4	11	6	2	1	24	24.7%	0.89
飛び入り	27	12	16	12	6	73	75.3%	4.87
合計	31	23	22	14	7	97	100.0%	2.31

■表2 2022年度秋学期 HELP DESK学習セミナー

No.	セミナー名	実施日	参加者（人）	No.	セミナー名	実施日	参加者（人）
1	スタディスキル（第1回）	9月14日	12	6	TOEIC	10月21日	25
2	スタディスキル（第2回）	9月16日	7	7	TOEFL IBT	12月 2日	9
3	簿記	9月23日	9	8	GPA（特待生）	12月 9日	17
4	ICT 超初心者編	9月28日	19	9	留学	12月16日	6
5	レポート作成のためのWord書式設定	10月19日	4				
合計							108

■図1 2022年度秋学期 相談項目ごとの相談件数



## 日本語ライティングセンター

日本語ライティングセンター（JWC）では、オンラインによるサービスを中心に、一部対面でのレポートチュータリング（図書館ブースのみ）を行いました。秋学期のレポートチュータリングは123人（前年比0.58）、レポート診断は170人（前年比0.67）の利用がありました（表3）。割合はレポートチュータリングが42.0%、レポート診断が58%でした。利用者数は前年比で減少しているものの、ライティングのプロセスのうち、プランニングやアウトラインはチュータリング、書き上げた原稿はレポ

ート診断と利用者が使い分けている様子が窺えました。

学習セミナーとしては、JWC主催のセミナーである「レポートお助け隊」を始め、SPACeレファレンス、図書館と連携した文献検索セミナー、また、図書館と連携した読書イベントなどを行い、述べ123人が参加しました（表4）。コロナ以降、セミナーはZoomで行うことが多かったのですが、12月の「レポートお助け隊」は数年ぶりにSPACeのアリーナで実施し、今後の本格的な対面サービス再開に向けての足がかりとなりました。

■表3 2022年度秋学期 JWC利用者（人）

	9月	10月	11月	12月	1月	合計	%	前年比
チュータリング（実施数）	1	35	37	37	13	123	42.0%	0.58
レポート診断	0	39	40	76	15	170	58.0%	0.67
合計	1	74	77	113	28	293	100.0%	0.63

■表4 2022年度秋学期 JWC学習セミナー

No.	セミナー名	実施日	主催	参加者（人）
1	文献検索セミナー【導入編】	10月 5日	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	4
2	レポートお助け隊	10月17日	JWC	2
3	秋を探そう～万葉集に見る日本の美の源流～	10月26日	図書館・JWC連携	72
4	レポートお助け隊	10月28日	JWC	8
5	文献検索セミナー【実践編】	11月 8日	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	3
6	そうだ、図書館行こうーQFT読書会ー	11月16日	図書館・JWC連携	15
7	レポートお助け隊（対面）	12月 9日	JWC	8
8	絵本ブッククラブ	1月31日	図書館・JWC連携	11
合計				123

## 調べごと相談

「SPACe調べごと相談（レファレンス）」では、レポートや卒論の参考文献検索、データベースの利用方法、その他の調べごと等のサポートを行うレファレンスサービスを行っています。

（対面とWeb会議システム「Zoom」は、週3日・各日3時間対面／メールは平日に対応）

2022年度の質問件数は、秋学期のみでは前年度より8減少しましたが、年間としては28増加し、前年度の1.25倍になりました。

た。これは、2019年度（コロナ前年）の1.5倍に相当します。「対面」によるレファレンス質問の大幅な増加が要因として見受けられます。

今後も対面を中心にして、メールやZoomによる回答も効果的に併用しながら、サービスを実施して予定です。

（下表は2022年度・秋学期のみの数値になります）

■SPACe調べごと相談（レファレンス）質問件数／2022年度・秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期	%
学術文章作法	0	11	9	17	2	39	76%
演習（卒論）	1	2	0	1	0	4	8%
その他	1	0	2	5	0	8	16%
	2	13	11	23	2	51（59）	

（ ）は昨年度

CETLは学士課程教育機構の教育支援組織として、FD・SD委員会や教務課と連携して様々なFD・SDイベントを企画・運営しています。以下、2022年度下半期の活動報告です。

## 教育フォーラム

### ●第9回創価大学教育フォーラム

2022年10月1日(土)、第9回創価大学教育フォーラム(第20回FD・SDフォーラム)を開催しました。学内外より大学関係者や高等学校教員、学生ら126名の参加がありました。フォーラム午前の部では、鈴木学長の挨拶の後、関西国際大学の濱名篤学長より「多様化する学生とこれからの大学教育～コロナ禍を経ての課題と可能性～」と題した基調講演を賜りました。参加者からは「今後、多様な学生に対し、授業内容や生活指導など様々な面において、どのように対応

していくのがよいかを考えていくうえで有益な内容でした。」などの声が寄せられました。

また、午後には学部別のFD分科会という形で法学部、文学部、CETL、障害学生支援室がそれぞれセミナーを開催しました。



濱名学長

## 学士課程教育機構FD・SDセミナー

### ●第2回学士課程教育機構FD・SDセミナー

2022年10月28日(金)、桜美林大学 リベラルアーツ学群の井下千以子教授を講師にお招きし、本年度第2回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。「論理的に考え、表現する力を育む～教員の多様性を活かした“共通教育と専門教育の接続に向けて”～」と題して、共通教育と初年次教育の理念、入口だけでなく、出口も見据えた初年次教育の考え方、共通教育の成果を専門教育にいかにつなげるか等についてお話いただきました。



井下先生

39名(本学教職員)の方に参加いただき、アンケートには、「大変有意義な内容でした。レポートや卒論の指導に使える観点が多かった。」等の声が寄せられました。

### ●第3回学士課程教育機構FD・SDセミナー

2022年11月16日(水)、大阪成蹊大学 経営学部の成瀬尚志准教授に講師をご担当いただき、本年度第3回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。「レポート課題をどのように設定するか?—自分で考えさせるレポートの出し方について考える—」と題して、レポートに関する参加者同士のグループディスカッションを取り入れながら、レポート課題を提示する際の検討すべき点や、レポートの論題、「よいレポートとは何か?」といった点についてお話いただきました。



成瀬先生

27名(本学教職員)の方に参加いただき、アンケートには、「レポート課題の出し方について、改めて考え直す機会が得られて大変に勉強になった。」等の声が寄せられました。

## 新任教員研修

### ●第3回新任教員スタートアップセミナー

2023年1月21日(土)、「第3回新任教員スタートアップセミナー」が開催され、2021年9月以降に採用された新任教員12名が参加しました。秋学期の授業の取り組みを振り返るグループワークの後、東北大学高度教養教育・学生支援機構(大学教育支援センター)が提供するFD動画コンテンツ「授業設計論」を視聴し、ディスカッションを行いました。

続いて、総合学習支援オフィスの石橋部長より、授業ポートフォリオやポータルサイト上で使える様々な授業運営に活かせる機能をお話いただき、最後に関田一彦CETLセンター長と参加者で質疑応答が行われました。参加者からは、「授業計画の仕方を再確認できたので、シラバス作成の際に意識した

いと思いました。また、ポートフォリオの実践例を見せていただいたので、ポートフォリオを活用できたらと考えています。」などの声が寄せられました。



## 産学連携科目の開講など昨年度の取り組みについて

### ■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

データサイエンス教育推進センターは、学生たちが「世界市民として、各学部で学ぶ専門分野において、数理・データサイエンス・AIのスキルを活用した問題解決能力」を飛躍的に高めていけるように寄与していくために、2021年5月に設置されました。昨年度の取り組みについて、3点紹介させていただきます。

1点目は、文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）に応募し、認定されたことです。これは、数理・データサイエンス・AIを活用して課題を解決するための実践的な能力を育成することを目的として、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術について体系的な教育を行うものを文部科学大臣が認定及び選定して奨励する制度です。本学が昨年認定されたりテラシーレベルの上位にあたるもので、本学のデータサイエンス基礎教育プログラム（応用基礎レベル）に該当します。これは、データサイエンス副専攻の必修科目である「データ・サイエンス」と「AI基礎」で構成されています。昨年8月24日に第1回認定の結果が発表され、本学の取り組みが選定されました。この第1回認定では国公立大学を含む26校が選定、うち私立大学は9校が選定されています。ご協力またご支援くださった皆さま、大変にありがとうございました。

2点目は、産学連携科目としての共通科目「データサイエンス演習」に関するものです。この科目は、データサイエンスを学ぶ学生が、企業の目線で実践的な演習に取り組むことを目的として設置されました。本学では、2021年度より日本IBM株式会社との共催科目として、開講してきました。これに加えて、アスクル株式会社との共催により、昨年度の秋学期にも開講することができました。アスクル株式会社との共催科目では、実社会での問題を解決するために、課題や問題点を見つけ、課題に応じた適切な分析方法を選択し、データ分析を行って実践経験を身に着けることを目的としています。この目的のため授業は、① Python言語を使った機械学習の基礎（教師あり、教師

なし）の修得（授業7回分）、② 企業の実データ（eコマースなど）を使った演習と経営シミュレーション（授業4回分）、③ 実データを用いた協働学習（PBL）（授業3回分+成果報告）という3つの内容から構成されています。アスクル株式会社に協力をお願いして、②の授業の講師を派遣して頂き、また③のデータの使用許可を頂きました。学生たちの満足度も高く、充実した演習とすることができました。

3点目がワークショップの開催です。数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムの連携校として、本センターとコンソーシアムの共催で2023年1月27日（金）にワークショップ「学生とつくるデータサイエンス教育～アクティブラーニングのための教職学・産学連携～」を開催いたしました。創価大学ではデータサイエンスを学ぶ上で、より実践的な体験となるよう、アクティブラーニングを積極的に活用しています。このワークショップではアクティブラーニングを推進する上で、学生SAが行っている取組や企業との連携について紹介しました。内容としては、鈴木学長から本学のデータサイエンス教育について概観的な紹介があった後で、文部科学省高等教育局専門教育課の木谷課長補佐より「数理データサイエンスAI教育の動きや現状」と題して講演して頂きました。次に「アクティブラーニングのための教職学連携」と題して、服部講師と経済学部生の岡崎真子さんから講演を頂きました。また「アクティブラーニングのための産学連携」という講演では、浅井より産学連携科目「データサイエンス演習」を紹介し、アスクル株式会社の川村真澄部長・田中祐史研究員また理工学部生の白川演義さんから講演がありました。多くの方のご尽力のおかげで大盛況のワークショップとなりました。関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

本センターは、今後も学内外と広く連携をとりながら、創価大学のデータサイエンス教育のさらなる充実に向けて取り組んでいきます。

#### 学士課程教育機構 新任教職員紹介

学士課程 准教授……鈴木 道代  
SPACe 助教……小畑 美奈恵  
SPACe 助教……北林 茉莉代  
SPACe 助教……上野 祥

WLC 講師……ブライアン・ブシュナー  
WLC 講師……ザッカリー・ガーランド・ケリー  
WLC 助教……ユーージーン・ヘーフッド・アッドー  
WLC 助教……ラブンゼル・オールドノ・トマクデル



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第25号  
発行日 2023年5月12日  
発行者 創価大学学士課程教育機構  
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236  
<https://www.soka.ac.jp/seed/>